

ゲルク派による二種のコラムパ批判書

小林 守

I ツォンカパ (1357-1419) は顕密にわたって独創的な仏教体系を構築し、チベット仏教界に新たにゲルク派を創設した。ゲルク派教団はその後、仏教界のみならずチベット政界においても勢力を拡げてゆくが、その一方で、ツォンカパ及びゲルク派は、その学說的独自性そして恐らくはその政治的勢力伸張のゆえに他宗派の反感をかい、既にツォンカパ在世中に彼の学説はサキヤ派のロントウン (1367-1449) によって批判されたとも伝えられ、さらに彼の没後、諸論師によって批判は執拗に繰り返された。そのため、宗祖ツォンカパに対する他宗派からの批判 dgag pa を承けて、ツォンカパの後継者たちが回答 lan をおこなうことになった。いわゆる “dgag lan” である。

ゲルク派における “dgag lan” の述作は、多くの論師によって幾世紀にもわたってなされたが、最近ゲルク派の主な “dgag lan” を集めた便利な一冊が *dGag lan phyogs bsgrigs* (四川民族出版社, 1997・12) として中国から出版された (C 本と略)。同書には以下の 6 作品が収録されている。

- 1 サキヤ派の *Nor chen Kun dga' bzañ po* (1382-1456) の批判を論駁する *mKhas grub rje* (1385-1438) 作 “**Nor lan**”, pp. 1-68. Cf. 東北 No. 5462.
- 2 カルマ・カギユ派の *Karma pa Mi bskyod rdo rje* (1507-1554) の批判を論駁する *Se ra rje btsun pa* (1469-1544/46) 作 “**Kar lan**”, pp. 69-173. Cf. 東北 No. 6841; published by Champa Chogyal, New Delhi, 1969.
- 3 サキヤ派の *Śākya mchog dan* (1428-1507) と *Go rams pa* (1429-1489) の批判を論駁する *Se ra rje btsun pa/Paṅ chen bDe legs ñi ma* の作 “**Śāk lan/Go lan**” (ŚL/GL II と略), pp. 175-518. Cf. 東北 No. 6842.
- 4 *Go rams pa* の批判を論駁する *'Jam dbyaṅs dGa' ba'i blo gros* (1429-1503) 作 “**Go lan**” (GL I と略), pp. 519-605. Cf. 東北 No. 6843.
- 5 ドウク・カギユ派の *'Brug pa Padma dkar po* (1527-1592) の批判を論駁する *sGom sde śar chen Nam mkha' rgyal mtshan* (1532-1592) 作 “**'Brug lan**”, pp.

607-645. Cf. ロンドルラマ『カーダム派・ゲルク派尊師全集目録』全集 Vol. 2, 西藏蔵文古籍出版社, p. 538, 9-10.

- 6 サキヤ派やニンマ派などの見解の相違を検討する dBal mañ dKon mchog rgyal mtshan (1764-1853) の作品, pp. 647-743. Cf. *gSun 'bum dkar chag*, 西藏人民出版社, No. 00858 (2).

上の6作にはコラムパによるツォンカパ中観説批判を論駁する二種の再批判書 GL I / II が含まれている。筆者は現在、サキヤ派によるゲルク派中観説批判と、ゲルク派によるサキヤ派再批判の研究を進めているが、その一環として本稿では二種の“Go lan”のテキスト出版や述作の経緯、特徴の一端を報告しておきたい。

II はじめに上記4の GL I を取り上げることにしよう。

パンチェン・ソナムタクパ作『新旧カーダム派史』(全集 Vol. 11, Mundgod, 94a2-95b4) などによると、著者の 'Jam dbyaṅs dGa' ba' i blo gros (別名で 'Jam dbyaṅs Legs pa chos 'byor, ガロ dGa' blo と略) は、興味深いことにコラムパと同じ年の 1429 年の生まれで、諸師に就いて般若、プラマーナ、中観、律、アビダルマ、密教などを学習し、大学者となった。その後、サンプ・ラワメーで学習を続け、さらにデプン・ロセリンで 20 年ばかり研鑽を積んで、65 才 (1493 年) のときにデプン僧院第 8 代座主となり、75 才 (1503 年) で没。彼の許からは優れた弟子が輩出したが、ダライラマ 2 世 dGe 'dun rgya mtsho (1475/76-1542) もその一人である。また著作活動として、彼はデプン・ロセリンの教科書 *yig cha* を多数著わした。最近出版された *gSun 'bum dkar chag* には彼の著作として 2 帙 (00534-00535)、13 作品がみられるが、そのうち比較的大きな作品を挙げるなら『現観莊嚴論注』95 枚、『大乘莊嚴經論注』87 枚、『中論注』82 枚、『入中論注』57 枚 (cf. 東北 No.6846)、そして今問題の『コラムパ批判 GL I』57 枚がある。

GL I のテキスト出版について一言するなら、筆者は上記 C 本のほかに東北大学所蔵のペチャ 61 枚 (G 本と略) を披見しえた。G 本は出版記 *par byaṅ* によるとダライラマ 5 世 (1617-1682) が出版したもので、出版記にはこうある。

以上の [出版願文] は、第二の勝者である偉大なツォンカパの教室に対して栄光あるサキヤ派の教えを保持する一切知者コラムパと大学者シャークチョクの二人が論難し、それへの回答が、文殊と異ならないセラとデプンの二人の法主 [セラ・ジェツンパとガロ] によって著わされたが…… [サキヤ派による] 論難の書物は印刷に処せられていても [ゲルク派による] 答弁は印刷に処せられておらず、その書物の相続は稀であるから、片手落ちのごとくであり、よって、法施が尽きることのないために、ガンデン・プンツォクリンに

において出版したときに、サホルの僧〔ダライラマ五世〕が綴ったものである。（G 60b5-61a2）

これに対して C 本 GL I の出版記には、

木の申の歳に大出版所で新たに出版されて、そこにある。（C 605,9）

とあるのみだが、C 本に含まれる他の作品の出版記をみるなら、ここの「木の申の歳 *šin spre lo*」が第 16 *rab byuñ* のそれで 1944 年を指し、また「大出版所 *par khañ chen mo*」がシヨル大出版所 *Žol par khañ chen mo* を指すのは明らかである。よって、C 本 GL I は 1944 年のシヨル版に基づく刊本である。

C 本と G 本を比べてみると、C 本は脱文もあり（e.g. C 531,13, G 9a1; C 592,5, G 51a1-2）、やや杜撰な刊本だが、しかし印刷は鮮明で、しかも G 本とは異なった読みを提供してくれる点で間違いなく有益である。

さて、前述したようにガロと同一年のコラムバは、1468年に最初のまとまったツォンカバ批判として『見解の弁別 TS』（サキヤ派全書 Vol. 13）を著した。GL I はその TS を批判したもので、著作記 *mdzad byañ* にはこうある。

尊き法王である偉大なツォンカバの独自の体系が諸々の偉大な講説のなかに詳述されているうち、一般的には帰謬派の体系の注解の仕方と、特に多くの見解の急所の内奥に関して、自分の心の対象のなかに納まり切らないということを経由として、コウオの師ソナムセンゲという名の者が、文献資料と正理によって考察を加え批判するかたちにして、実に大きな書物の重荷を作ったが、そのなかでもこのような極めて不適切な問題点に関しては、「それを制圧する答弁を少しは行わなければならない」という遠方からの熱心な依頼も却けられず……ジャムヤン・ガウエーロドゥが、“*gser 'phyañ*”といわれる“火の女の酉の歳（1477年）”の蔵暦7月の白分に、栄光あるデブン大僧院において書き記した。（G 59b6-60a4, C 604,20-605,8）

ここに「実に大きな書物の重荷 *yi ge'i khur šin tu che ba zig*」とあるが、TS は 47 枚の中編作品だから、「重荷」とは分量的に大きいというより内容的に重いという意味だろう。また GL I は TS の 9 年後、コラムバ在世中の 1477 年に著わされている。サキヤ派によるツォンカバ中観説批判に対してゲルク派の側からのなされた最初期の *dgag lan* の一つであろう。

ところで、コラムバの本格的なツォンカバ中観説批判として『入中論注 TN』(121 枚)があるが、GL I が TN ではなくて TS を批判対象として取り上げたということは、GL I 述作時に TN が未だ著されていなかったからかもしれない。

すなわち、よく知られているように TS は、はじめにコラムバが常辺中観説（トゥルプバ説）、断辺中観説（ツォンカバ説）、離辺中観説（自説）を要約して提示し、そ

のあとに常辺中観説と断辺中観説を批判し、そして最後に自説の離辺中観説を解説するという構成をもつ。それに応じて GL I は、

- (1) 他説の陳述が巧みでないことを示す。(G 3b3-, C 523,13-)
- (2) 他説への批判の陳述が巧みでないことを示す。(G 10a1-, C 533,3-)
- (3) 自説の確立が巧みでないことを示す。(G 48b5-, C 589,2-)

という構成をもち、TS 本文を丹念に引用しつつコラムパ説を批判してゆく。そのうち注目されるのは、(1)においてガロがコラムパのツォンカパ説の提示の仕方の曖昧さを執拗に追及している点である。たとえば冒頭の一節にはこうある。

[TS のツォンカパ説を紹介する文脈に]、「中観派の否定対象は、人と法を真実に存在すると把握する“真実有の把握”にほかならない」(TS, 4b6)と書かれているのは、尊者「ツォンカパ」の御教説を字義どおりそのままに確立したものではないから、あんた自身が「ツォンカパの」お考えを理解した上で提示した学説と思われるが、[それはあんたが]ことばに通じていない様子をはじめに示しているのだ。(G 3b5-4a1, C 523,18-21)

ガロが言うには、コラムパはそもそも中観派の否定対象に“正理の否定対象”と“道の否定対象”があることさえも理解しておらず、また正理の否定対象を“真実有の把握 bden 'dzin”と捉えるのも、いかにも厳密さを欠く。よって、

あんたが語ろうと望むなら、語句の述べ方をはじめに学習すべきである。[[中観派の否定対象は……]というようなラフな言い方ではなくて]、たとえば、「中観派の体系における勝義を考察する論証因の微細な否定対象は……」という語句の用い方を学習すべきである。(G 4b1, C 524,16-18)

と批判する。まことに宣戦布告である。

しかしこの種の批判は TS には有効でも、TN に対してはあまり意味がない。TS とは異なり TN はツォンカパ作『入中論注』の本文そのものを豊富に引用しつつ批判を加える書物であるからだ。著作年は不明だが、TN の著作記や『コラムパ伝』(Delhi, p. 32)によると、それはコラムパがトゥブテンナムギェル僧院を建立した 1473 年以後の作である。たしかに TN にはガロの名は触れられておらず、その論述内容は必ずしも GL I における再批判を踏まえたものとも思えないが、しかし所引資料そのものに前主張を語らせるという TN の論述スタイルは GL I の批判(1)を意識した結果という可能性もあるだろう。

また GL I の内容的特徴の一つとして、ロントウン Roñ ston Śes bya kun rig への言及が比較的多くなされている点、注意を惹く。ロントウンはコラムパの師の一人で、最初のツォンカパ批判者の一人として有名だが、しかし後により有力なツォ

ンカパ批判者としてサキヤ派から Go/Śāk/sTag lo の三師が出たため、一般にゲルク派論師の意識においてそのツォンカパ中観説批判者としての存在が軽く、所謂 “Roñ lan” が著されることもなかったが、GL I に、

これほどのきわめて重い矛盾の集まりを、あんた一人が持ち運ぶことはできないから、尊師クンリク [=ロントウン] にもときどき [その重荷を] 負わせて速やかに歩いてゆくべきである。(G 11a3-4, C 534,22-23)

などと述べられているのは、ガロが GL I において同時にロントウン批判をも目論んでいたことを示しているだろう。ほかに、

あらゆる点で蒙昧である“一切を知る者”と、理解のない“理解者”との二人は、業界を否定した悪業により、一つの帰謬によって塵のように粉碎される。(G 24a4, C 554,15-16)
 kun tu rmoñs pa'i Kun rig dañ, go ba med pa'i Go bo gñis,
 las 'bras bkag pa'i las ñan gyis, thal 'gyur gcig gis thal bar byas.

という語呂合わせの巧い詩節にも、GL I 著作意図の一端がうかがわれる。

なお、筆者は GL I の後代への影響は未だ十分に検討できていない。少なくとも後述の GL II に GL I が直接言及されることはない。ここでは、ただ『チャンキヤ宗義書』(西藏蔵学出版社, p. 337,21-24) に言及されるガロ説が GL I (G 26a1-6, C 557,5-20) に見出されることを付言するに止める。

Ⅲ ガロが GL I を著してから 70 年ほど後にセラ僧院の大立者ジェツン・チュキギェルツェンが同じくコラムパ批判を企てた。その述作の経緯は、弟子のデレクニマ作『セラ・ジェツンパ伝』(Samath, pp. 85-87) によるところである：カルマ派のミキユドルジェが他空を説く『般若注』を著したのに対して、ゲンドウンギャンツォ (グライラマ 2 世) はそれを論駁する必要性を痛感し、1541 年頃にその論駁書の述作をセラ・ジェツンパに命じた；それを承けて後者は “Kar lan” (C 本 2) を著し、自著をミキユドルジェに献じたところ彼の周辺において高い評価を得た；ミキユドルジェからの依頼もあり、セラ・ジェツンパはその評価を決定的にすべくゲルク派説の正当性の証人という意味をもたせて新たに “Śāk lan/Go lan” の述作に取り掛かった；“Śāk lan” は完成させたが、セラ・ジェツンパに死が迫り (1544 年没) “Go lan” は冒頭部分を書き終えたに止まった；死を前にして彼が “Śāklan” と未完の “Go lan” をミキユドルジェに献じたところ、後者をそれらを絶賛した、と。

この伝承のうち、ミキユドルジェによる絶賛は怪しいが、セラ・ジェツンパの “Go lan” が未完成であったのは確かで、GL II の著作記に、

[GL II は], 尊師ジェツン・チュキギェルツェン・ペルサンポの御著書の [未完] の残余部分が少しばかり残っており, [そのような] 残余部分が残るのは美しくないで, 「残りはおまえが作りなさい」と…… “タシ” というお名前をもつ大法王によって勅令が熱心に賜われ, また多くの持三蔵者によっても「そのようにしなさい」と言われたことを受け入れて……デレクニマが聖観自在の住処であるバボンカにおいて綴ったものである。(G 236a4-b1, D 427,3-428,9 C 516,8-18)

とあるように, 現存 GL II は, 師の遺業を弟子のデレクニマが完成させたものである (G 163b1, D 97,13, C 413,4 以下がデレクニマの作). Yab rje sKal ldan rgya mtsho (1607-1677) 作『セラ・ジェツンパ伝』(Sarnath, pp. 40-41) によると, セラ・ジェツンパはまさに死の前日まで “Śāk lan/Go lan” を気に留めていたという. 無念であったのだろう.

なお, デレクニマは『入中論注』(東北 No. 6839) を著しており, そこには数多くのコラムパ批判がみられる. 紙幅の都合で論証は省かざるをえないが, デレクニマは師セラ・ジェツンパの “Go lan” を参照しつつ『入中論注』を著したのち, 他からの勧めもあり, 師の未完の “Go lan” を完成させたのだろう.

GL II のテキストとして筆者は, 上記 C 本のほかに, GL I と同じくダライラマ 5 世がガンデン・プンツォクリンで出版したベチャ G 本 (東北 No. 6842) と, 1969 年にデリーで出版された D 本 (Vol. I: ŚL, Vol. II: GL II) を披見しえた. GL I と同じく GL II も 1944 年にシュル版が出版されたが, C 本と D 本はそのシュル版に基づく刊本である. C 本を G 本/D 本と比べてみると, C 本には脱文, 余文が多く認められ, 杜撰な刊本といわざるをえない.

また GL II の構成の特徴としては, GL I がコラムパの TS ̄ を批判対象としたのに対して, GL II はコラムパの TN ̄ を批判対象とし, TN ̄ 本文を豊富に引用しつつ批判を展開する. 内容的には, デレクニマが自著『入中論注』(4b3-4) において Bhāviveka/Jñānagarbha を毘婆沙中観派と規定する点, ゲルク派正統説から逸脱している印象を受けるが, GL II においてもゲルク派の体系において中観帰謬派には自立的論証が定義上あり得ないにも拘らず「Buddhapālita も自立的論証をおこなう」(G 185a3, D 196,13, C 444,15 以下) と述べるなど, 注意を要する記述が認められる. 詳しい分析は別の機会を俟ちたい. (注記割愛)

〈キーワード〉 dgag lan, Go lan, dGa' blo, Se ra rje btsun pa, bDe legs űi ma
(苫小牧駒澤大学助教授)